

それは西部の町であった。黄土色の埃舞う道を農民服のメキシコ人や籠を抱えた職人が行き交い、サルーンの前で停まった駅馬車からは着飾った貴婦人が降りてくる。腰に銃を携え馬に乗ったならず者が通りの中央を横切って行くのを、ライフルを持ち胸に銀バッジを輝かせた保安官が睨んでいる。

それらの喧騒に紛れ、町の外れに木を打つ金槌の音が響いていた。重々しくも軽やかな、ゆっくりとした確かなテンポ。それは扉脇に長方形の木箱が立て掛けられた建物の中で、やはり木箱に囲まれたひとりの女が打つものだった。大きく長い、人間が入るだけの大きな木箱。死体が収まり極となる棺桶。

女は喪服のような黒い上着とズボンにタイをつけ、白い手袋をはめた手で金槌を握る。先住民を思わせる浅黒い肌、長く黒い髪は眉も睫毛も薄い顔に陰鬱げにぞろりと掛かり、手元を見据える両目は淀んだ黒い三白眼である。髪と肌と虹彩の黒の中で、白眼部分だけが青白く浮かびあがって見える。

背が高く痩せぎすで案山子スチンクのようなこの女が、いつから棺桶屋をやっているのか町の誰も知らない。町外れのこの家に熟練の棺桶職人がいるという認識だけを皆が持っている。

## 「棺桶屋」

その女の元に、別の女が訪れる。棺桶屋は顔をあげ、戸口を塞ぐように立つ帽子を被った影を見た。仕立てのよさそうな上着とベストと赤いリボンタイ。腰にはガンベルトを巻き、ホルスターから覗くのはコルト・リボルバー S. A. A.。いかにも伊達者の賞金稼ぎといった出で立ちの、金髪の若い女だった。

「仕事をくれてやりに来たわよ」

肩の上で波打つ髪を払いながら賞金稼ぎは不機嫌そうに言い捨て、すぐに外へ取って返す。棺桶屋は金槌を置き、機敏過ぎも緩慢過ぎもしない生身の人間の動きで立ち上がった後を追う。

外には男女三つの死体が積まれた荷馬車が一台停まっていた。棺桶屋はなにを尋ねるでもなく、心得た様子でポケットから出した巻尺を伸ばし、死体を測りに寄る。それぞれの身長と幅、縦と横。

「どれもちょうど合うがある」

「作るのを待たなくていいのね。ならとつと詰めて」

手早く死体を測り終えた棺桶屋に、賞金稼ぎは横柄な口調で言う。棺桶屋の声は低いが不思議と澄んでおり、賞金稼ぎの声は酒と煙草で焼けたように掠れている。

「中で待て」

賞金稼ぎは少し嫌そうな顔をして、しかし返事をするかわりに上着のポケットからシガーケースを取り出しながら扉をくぐった。棺桶屋もそれに続き、小屋の中に並ぶ棺桶の物色を始める。立ち働く黒尽くめの案山子を見る賞金稼ぎは、細い葉巻を啜えて棺桶のひとつに無遠慮に腰掛けた。踵の拍車を鳴らして脚を組み、ブーツの底でマツチを擦る。

空の棺桶を担いで外に出、しばらくして戻ってくることを棺桶屋は二度繰り返した。

「どこかへ運ぶのか、あの死体を」

三度目に表に出る前に運ぼうとした棺桶の傷に気付いて、ヤスリを手取るついでといった様子で賞金稼ぎに尋ねる。

「……アリゾナの金持ちの所へね。直接渡さなきゃカネを貰えない仕事よ、保安官にじゃ駄目なの」

苦い顔で煙を吐き出し、賞金稼ぎが答えた。